

エリザベス・ギヤスケルの障害者表象

星 志乃

序

エリザベス・ギヤスケルの作品に関する先行研究では、社会問題小説における労働者の表象、そうした社会的弱者との関わりを通じたヒロインの成長や家父長制社会での自立を取り上げた批評が多くなされている。また、ギヤスケルの作品には多くの障害者が登場しており、ヒロインに焦点を当てた障害者の看護行為に関してはこれまでも考察されてきたが、¹ 障害者自身の表象に焦点を当てた研究は未だかつて見られない。実際、文化や時代の違いを超えて障害者が様々な文学作品に描かれているにもかかわらず、文学・文化研究がそれらを研究の対象としてこなかったのを多くの研究者たちが指摘し始めており (Hall 31)、障害者表象に関する研究の欠如はギヤスケル研究に限ったことではない。しかしながら、執筆活動と同時に社会的弱者の救済に積極的に参加していたギヤスケルの文学を研究するうえで、労働階級と同様に社会的弱者であった障害者に焦点を当てて彼女の作品を考察することは、作家に対する理解を深めるために必要だと思われる。

1975年に英国で The Union of the Physically Impaired Against Segregation (UPIAS) がインペアメント (impairment、身体・精神面における機能不全) とディスアビリティ (disability、社会における能力不全) を分けて定義したことは、ディスアビリティスタディーズ (障害学) の発展に大きく影響している。² UPIAS は、インペアメントを持つ人々の能力の発揮を妨げている (disable) のは社会であると提言し (Burker and Murry xiii)、身体面と社会面を分離して捉え、インペアメントではなくディスアビリティが問題だと強調した (長瀬 15)。この二つの言葉の定義は、その後ディスアビリティスタディーズの研究や活動の基礎として用いられ続けている。本稿では、インペアメントを持つ人のことを「障害者」と表記する。「害」の表記に関しては、近年「障がい」とすることも目立ってきたが、ディスアビリティスタディーズのほとんどの文献で漢字が使用されているため、本稿でも漢字表記に統一する。また、身体・精神面における機能不全と、社会における能力不全とを意識的に区別したい第1節内では、「インペアメント」と「ディ

スアビリティ」の表記を使用する。さらに、インペアメントを持たない人のことは、長谷川潮が『児童文学のなかの障害者』（2005）で使用している「非障害者」の表現を借用する。³

本稿の目的は、これまでほとんど注目されてこなかったギヤスケルの作品における障害者の表象に着目し、彼らがどのように描かれてきたか、また彼らが作品においてどのような役割を担っているかを明らかにすることである。分析の対象は、「リビー・マーシュの三つの祭日」（‘Libbie Marsh’s Three Eras’, 1847）、『メアリ・バートン』（*Mary Barton*, 1848）、「マーサ・プレストン」（‘Martha Preston’, 1850）、「ペン・モーファの泉」（‘The Well of Pen-Morfa’, 1850）、『ルース』（*Ruth*, 1853）、「一時代前の物語」（‘Half a Life-Time Ago’, 1855）である。⁴ これら6作品を対象とするのは、ギヤスケルの作品の中でも障害者とヒロインの関わり合いが作品全体を通じて描かれている、もしくはヒロインが障害を持つようになるからである。まず第1節と第2節では「リビー・マーシュの三つの祭日」、「ペン・モーファの泉」、「マーサ・プレストン」、「一時代前の物語」の短編4作と『ルース』を中心に引き上げ、障害者の表象をもとに彼らに対する偏見や先入観を明らかにする。第3節では非障害者を支える障害者である『ルース』のベンスン氏と、『メアリ・バートン』のマーガレット・ジェニンズについて考察する。ベンスン氏は障害者でありながら非障害者のルースを救い、社会復帰するのを支える役割を担っている。マーガレットも、盲目という障害を持ちながら力強く生きており、非障害者に救いの手を差し伸べる力を持った障害者として描かれているように見えてならない。ベンスン氏とマーガレットの作中での役割や表象を分析することで、当時の他の作家と異なったギヤスケルの障害者表象が明らかになると考える。

1 従来のディスアビリティとギヤスケルが与えた救い

ディケンズの「クリスマス・キャロル」（*A Christmas Carol*, 1843）に登場するタイニー・ティムのように、19世紀英国の小説では、障害者が非障害者より劣る存在であることを想起させる描写が多い。こうした障害者表象は、UPIASの「社会がインペアメントに対して不配慮であるがためにディスアビリティが生じている」という主張と一致するものである。ディスアビリティストディーズが学術分野としての認識を得始めたのは1960年代である（Goodley 1）。障害の医学的モデ

ルを否定して新たな社会的モデルを理論化することが、1960年代後半から1980年代にかけての障害者の権利に関する政治的・社会的運動の基盤となり、1990年代の英国・米国等の障害者に関する法律制定に影響を与えた (Hall 19)。ディスアビリティスタディーズが文学・文化研究に導入されたのは1980年代後半からで、それまでは主に政治的・社会学的視点から注目される学術分野であった (Hall 30)。その先駆けとなったのは、1995年のLennard J. Davisによる *Enforcing Normalcy: Disability, Deafness, and the Body* の出版である。Davisは「障害者」と呼ばれる人々を生み出す正常 (normalcy) の概念を指摘し、それが肯定的な特徴として様々なメディアを通じて表象され、社会生活のスタンダードとして強要されていることを問題視した。その後、文学・文化研究におけるディスアビリティスタディーズに関する書籍が年々増えてきている。しかし、これまでの研究は1990年代以降の文学作品や米文学を対象とするものが多く、19世紀英国文学の障害者表象に注目した研究はあまり進んでいない。⁵ 一方で、ヴィクトリア朝は急速に産業化・機械化が進んだことで障害の種類も多様化し、多くの障害は後天的なものだったと言われている (Holmes; “Embodying Affliction” 62)。実際、今回研究の対象としている作品でも、描かれている障害者全員が後天的に障害を持つようになっている。また、障害者の権利が認められるようになったのは20世紀終盤で、⁶ ギヤスケルらの作品に描かれているように、ヴィクトリア朝の障害者は差別の対象となる存在であった。障害者の権利が認められる以前の文学における障害者表象に注目することは、文学研究のみならず、当時の社会における障害者の立場や差別を明らかにすることにも貢献できると考える。そこでまず、ギヤスケルの作品では身体・精神的機能不全のインペアメントと、社会的能力不全のディスアビリティがどのように描かれているかを確認したい。

第一に、身体的・知的に重いインペアメントを持つ人は勤労収入を得ることが難しいため、経済的に自立できない。彼らは他者の経済力に依存して生きていくしかなく、そのために哀れで忌み嫌われるべき存在として認識されていた (Holmes; *Fictions of Affliction* 102)。障害者の経済的依存性は、「リビー・マーシュの三つの祭日」にも反映されている。⁷ ホール家では、フランクが寝たきりで働けないため母マーガレットの収入で生計を立てている。家父長制社会のヴィクトリア朝において、本来男性として一家の経済力を持つべき立場にあるフランクは、家庭を

支えられず、ひいては労働者としての社会的責任を果たせない存在となっている。ヒロインで孤児のエリザベス・マーシュ（リビー）はディクソン家に下宿しており、向かいのホール家のフランクが下半身不随で友達がいないことを知る。リビーが彼にカナリヤを贈ったことをきっかけにリビーとホール家の親交が始まり、聖霊降臨祭の祝日には三人でダナムへ旅行することになるが、下半身不随のフランクを船まで運ぶことが「大きな難問」（I:57）と表現されている。そしてこの難問はリビーが自腹を切って馬車を雇うことで解決される。結果的にフランクのディスアビリティは、未来への希望を失っていたリビーが社会での自らの存在意義を見出す契機になっている。

第二に、インペアメントはジェンダーやセクシュアリティの観点でディスアビリティを生んでいる。「ペン・モーファの泉」のネストは、足が不自由になる以前は村一番の美人と言われるほどの美貌と思いやりの心を持った女性だった。しかし彼女が怪我をした後、農家の息子のエドワードは、彼女の足が一生不自由だと知ると「健康で有能な女の人でも大変な」（I:165）農家の重労働を、障害者がこなすのは不可能だという理由で婚約放棄を明言する。しかしその後ネストの母エレナに対し、「ネストはどんな男の奥さんにもふさわしくないってことは、ご自分の良識でお分かりだと思います」（I:166）と述べ、農家の重労働は建前の理由にすぎなかったことが明らかとなる。つまり、外から疲弊して帰宅する男性を癒す場である家庭を守るという、ヴィクトリア朝の女性の役割を担うのは、障害者には不可能だと指摘しているのである。

また、インペアメントを持つことは女性に限らず男性の結婚にも影響を与えることが他の作品から読み取れる。『ルース』でミス・ベンスンは「わたしはマスター・サースタンを置き去りにすることができません。弟は一生結婚できないでしょうから」（124）と恋人からの結婚の申し込みを断っており、インペアメントを持つことと結婚の密接な関係がうかがえる。さらにジョージ・エリオットの『フロス河畔の水車場』（*The Mill on the Floss*, 1860）で、マギーは足の不自由な兄の友人フィリップと恋仲になるにもかかわらず、インペアメントを持たないスティーブンに惹かれてフィリップのもとを離れてしまう。これはフランク同様に、男性障害者は経済的弱者になりやすかったため、ヴィクトリア朝における男性としての役割が果たせない可能性が高かったことと関連しているのではないだろうか。

インペアメントは、障害者本人だけでなく障害者の世話をする人までも孤立させる。「マーサ・プレストン」のウィル・ホークショウは、婚約者であるマーサの弟が持つ知的障害を理由に、他の女性との結婚を選ぶ。弟の死後、一人になったマーサは自分の家族を持てなかったことを次のようにひどく悲しむ。

She was growing old alone; with a most loving nature, she had none to love as she could have done, had God permitted her to have husband and children; and sometimes in the deep midnight she cried aloud to heaven in her exceeding grief that she had never heard a child's murmuring voice call her 'Mother.' (I:126)

Martha Stoddard Holmes によると、ヴィクトリア朝では病気や身体的欠陥が遺伝することに対する医学的懸念があり、インペアメントを持つ女性は子どもを産むことを許されていなかった (Holmes; *Fictions of Affliction* 7)。Holmes は、ヴィクトリア朝のメロドラマのヒロインとディスアビリティの関係について、インペアメントを持つヒロインは、恋愛関係をどれほど発展させても、ほとんどの場合において生物学的親にはなれないとも述べている (6-7)。さらに、「マーサ・プレストン」の修正執筆である「一時代前の物語」でも、知的障害の弟の面倒を見たいヒロインのスーザンと、それを嫌がる婚約者との間で意見が合わず、二人の縁談は反故にされる。マーサと同様、スーザンは自分を愛してくれる者がいないことより「愛すべき者がこの世に誰もいないこと」(III :373)の方が辛く、弟の死後、孤独を恐れる様子が記述されている。『フロス河畔の水車場』の結末では、マギーとトムの墓参りをする際スティーブンは妻を連れているが、フィリップは一人である。障害者は家族を持つことが許されない存在だったかのようである。こうした障害者表象は、ヴィクトリア朝で障害者やその家族がいかにも卑しまれていたか、周囲からの差別の対象になっていたかを示していると考えられる。⁸

しかし忘れてはならないのは、「マーサ・プレストン」において、マーサが最終的に元婚約者の息子を養子とすることで疑似家族を形成していることである。スーザンも元婚約者の死後、彼の妻と子どもたちを自分の農場に呼び寄せ、共に生活し始める。ネストもメアリー・ウィリアムズという重い精神障害を持った少女を引き取って一緒に住み、面倒を見始める。彼女たちが、血は繋がっていないも

の家族と呼べる人、生活を共にする人を得ているのは、家族の絆や家庭の力を重要視していたギヤスケルだからこそではないだろうか。ギヤスケルの障害者表象には、他の作家には見られない救いが与えられているのである。

2 新たな障害者像の模索

文学に登場する障害者は、哀れみや同情心を掻き立てる役割を担うことが多いと言われている (Davis 9)。また、障害者は文学作品中で脇役として描かれることが多く、障害者を中心的に扱う作品は非常にまれである (Davis 9)。これは、ヴィクトリア朝において障害者が社会の周縁に位置付けられていたことをそのまま表しているとも言える。ロイス・キースは、「身体障害者が非難され、罰せられ、同情され、いずれにせよ正式な社会の一員として受け入れられなかったことは明らかである」(37) とし、物語における身体障害者の描写の役割は大きく三つに分類できると述べている。第一に「悪魔そのもののように恐ろしく邪悪な役割」、第二に「早死にするように定められた、天使のように純粋な弱者」、そして第三に「病気ではあるが死にかけているわけではなく、困難な宗教的あるいは精神的旅に出ることが必要で、最終的には癒されるという役割」である(37-38)。「リビー・マーシュの三つの祭日」にも、前述の第二の障害者の役割が忠実に反映されている。作中では、フランクが周囲の人々からの同情を集める描写が不自然なほど多い。フランクについて初めて語られる場面は、「悲哀に満ちた人々に対して憐れみの光」(I:51) が注がれていた時刻と形容され、フランクの身体描写をする前に世界を憐れみで包み込むことで、障害を持つフランクについて語りだす準備をしているようにも見える。その後も「重苦にあえぐ少年」(I:51)「かわいそうなフランキー」(I:58)「哀れなフランキー・ホール」(I:66) など、フランクに言及する際には彼の哀れさを強調する形容詞を伴うことが多い。

フランクに対する同情が最も強調されるのは、彼が母とリビーと三人でダナムへ旅行した際、日曜学校の小さな女の子からパンを分け与えられる場面である。フランクを観察していた女の子は、自分が持っていたパンの半分をフランクに投げ与えるが、自分の大胆な行動を恥ずかしく思い、姿を隠して彼の様子をうかがう。その反面、フランクは「喜びと幸せに圧倒され、ほとんど食べ物に手がつけられなかった」(I:62)。彼は小さな女の子という立場の弱い人物から憐れみをか

けられるほど無力な人物として描かれている。また、女の子はフランクのことをずっと見ていたが、フランクは女の子を見ておらず、与えられたパンに手をつけることもできないまま常に見られる対象であり続けている。

また、この「第二の祝日」の章では、女の子だけでなくフランクを取り巻く空間の清らかさが章全体を通じて違和感を覚えるまでに強調して描かれている。例えば、ダナムに向かうために乗った馬車の内装を母マーガレットはまるで天国みたいだと感心し、旅行の終盤でフランクは「ここの人たちは天使みたいに親切だね」(I:63)とダナムの人々を形容する。さらに、天国がダナムのような場所なら死んでしまっただけでそこに住みたいなどと言い出す始末である。そして、続く「第三の祭日ミカエル祭」の章ではフランクの葬式の様子が描かれており、フランクは病弱で同情の対象となった末に早死にするという、典型的な障害者像に収まっていることが歴然とする。

その点、「ペン・モーファの泉」のネストは、文学に登場する障害者としては新しい特徴を示している。まず、脇役ではなくヒロインが障害者である。その結果、フランクに比べて障害者の言動や心情の描写が格段に増えている。例えば、母親からエドワードと結婚することができないと明かされたとき、「障害のある身になったのだから、農場主の奥さんになる資格はないのだ」(I:168)という母親の考えを受け入れようとせず、「母に反発し、世間に背を向け」(I:168)ている。フランクのような病弱さではなく、ネストの強い意志に語りの焦点が当てられている。また、献身的に彼女を看護する母親に対しても横暴な態度をとり、母親の配慮に反してきつい肉体労働を強く求めるさまは、障害にばかり注目される自分の体に備わっている能力を誇示するかのようである。

さらに特筆すべきは、ネストが非障害者からの憐れみに対し強い嫌悪感を抱いていることである。彼女は家の外に出るのを拒んだが、それは障害のある自分の体を他人に見られるのを恐れていたからではなく、恋人に見捨てられた者として憐れまれるのが嫌だったからである。そして、「涙やどんな哀れみのそぶりも、足の悪い娘をひどく苛立たせ、母の愛撫さえ彼女は嫌がるようになった」(I:168)とまである。また、人々から尊敬されていたメソディスト派の説教師デイヴィッド・ヒューズは、ネストの力強さを見抜き、彼女に「私はおまえを哀れみはしない。おまえには哀れみなど必要ない」(I:171)と述べる。同情や憐れみの対象と

なることで幸福を感じていたフランクと異なり、やはりネストは他者の憐れみの対象として留まることに満足せず自らの権利を主張していくという、新しい障害者像を提示している。

しかしながら、ギヤスケルは新しい障害者像を「ペン・モーファの泉」で十分に描ききれたとは言い難い。母エレナが亡くなったあと悲嘆にくれるネストは、デイヴィッドから以下のような説教を受ける。

‘... Henceforward you must love like Christ; without thought of self, or wish for return. You must take the sick and the weary to your heart, and love them. That love will lift you up above the storms of the world into God’s own peace. ...’ (I:171)

この説教を聞き、ネストは預言者に会ったかのように畏敬の念に打たれており、彼は実際、彼女にとって預言者だったと述べられている。そしてネストはメアリの保護者になり、共に生活し始める。自分より重い障害を持つ者の世話をすることは、非障害者の母親との生活では成し遂げられなかったネスト自身の能力を示すことを可能にする。だが、「リビー・マーシュの三つの祭日」でリビーにカナリヤを売った男が「病弱な連中が、才能のある賢い奴よりか、愛情を示してくれる奴の方を好きになるってのは、よくある話じゃ」(I:54)と述べるように、ネストがメアリを保護した大きな理由は、自分への信頼感を示してくれたからであろう。持っている能力を周囲に認めてもらおうとするネストの姿勢は障害者として新しいが、自分より障害が重い者に憐れみをかけるという手段は従来の障害者像と何ら変わっていない。

そして、ネストがメアリの世話をする過程は、キースが言う「困難な宗教的あるいは精神的旅に出ること」(38)とみなすことができる。メアリは、ネストのもとに保護を求めてやって来たが、精神が常に安定していたわけではない。メアリの精神錯乱によるひどい発作の恐ろしさを周囲の村人は知らなかったが、それはネストが黙ってひとりで耐え抜いていたからである。ネストは死が近づくと、足が不自由になる前の子ども時代や娘時代の夢を見るようになる。とうとうもう一度あの泉を見たくてたまらなくなり、メアリを連れて向かった美しい泉で、苦しむことなく息を引き取る。彼女の死は、「永遠の生命」(I:175)と表現され、こ

うしたネストの最期はキースが提示した第三の障害者の役割と一致するものである。この点からも、ネストは新しい障害者像を示しきれたとは言えないだろう。しかし、ネストの死は、たとえ強い意志を持っていても、障害者がヴィクトリア朝社会を生き抜くのは困難だったことを表しているのではないだろうか。

3 新しい障害者像

『ルース』のベンスン氏は、非障害者のルースを救うという点で注目すべき障害者である。彼とルースが会うのは、ウェールズの川の石の上で立ち往生していたルースをベンスン氏が助ける場面である。彼らの二度目の遭遇は、ベリンガムに棄てられて絶望したルースが自殺しようとしていた時である。走り出したルースを追いかけていたベンスン氏が転倒し、痛みのあまり叫び声をあげること、自暴自棄になっていたルースは我に返り、自殺を思い留まる。ここでは彼の障害が人の命を救う上で役立っており、欠陥として認識されていた障害が逆に力となることが見て取れる。その後もベンスン氏はルースを自宅で保護し、人生に必要な教養を与え、ルースを立派な母親に成長させる。つまり、ベンスン氏は非障害者をエンパワメントさせる能力を持ち併せた障害者である。ルースは教養を身につけたことでガヴァネスとしての働き口を手に入れ、経済的力もつけ始める。彼女が疫病患者の看護に応募した際も、不安を抱えるルースをベンスン氏は鼓舞しており、精神的支えになっている。この看護行為がきっかけでルースは「墮ちた女 (fallen woman)」であるにもかかわらず、町の人々の感謝と尊敬の対象となるのである。ベンスン氏は、非障害者を支える障害者であり、キースが挙げた障害者の役割に当てはまらない新しい障害者像の一面を示している。

さらに、『メアリ・バートン』のマーガレット・ジェニズはベンスン氏とは異なる新しい障害者像を示しているように思える。両親を亡くし祖父ジョブ・リーと二人で暮らす彼女は、自分の部屋の階下に住むアリス・ウィルソンの紹介でメアリ・バートンと友人になる。マーガレットはお針子として働いていたが、劣悪な労働環境が原因で失明してしまう。しかし、彼女は盲目になった後も孤独になることなく歌手として活躍し、重要な場面では親友としてメアリの支えとなっている。障害者であるマーガレットが自己実現を果たしたうえで非障害者のメアリを支える構図は、これまでに分析してきた短編作品の障害者像やベンスン氏と一

線を描いており注目すべきである。

第一に、マーガレットは経済力を持った障害者である。視力を失いかけていた頃、彼女はお針子としての収入がなくなることを非常に懸念していた。しかし、彼女は美声の持ち主で、音楽講師に認められたことをきっかけに、講師と共に工業都市を巡回し始めてからは、歌うことでお針子時代より多くの収入を得るようになる。そして、メアリを二度も経済的に支える。一度目は、メアリの父が失業しバートン家が貧困に飢えていた時である。マーガレットは、「わたしにはうまく使いきれないくらいお金が入ってくる」(123) と言い、以前より楽に収入を得ていることを告白し、メアリにお金を分け与える。二度目は、ヘンリー・カーソン殺害の容疑をかけられたジェム・ウィルソンの無実を証明するため、メアリがリバプールからアメリカ行きの船舶に乗るウィル・ウィルソンを呼び戻しに行ったり、弁護士を雇ったりするための費用を渡す場面である。

‘... And now I’m going to be plain spoken. You’ll want money. Them lawyers is no better than a sponge for sucking up money; let alone your hunting out Will, and your keep in Liverpool, and what not. You must take some of the mint I’ve got laid by in the old teapot. You have no right to refuse, ...’ (219)

メアリがリバプールでウィルを見つけ出し、裁判でジェムの無罪判決を得ることは、マーガレットの支援なくしては不可能だった。一人で列車に乗ってリバプールへ向かい、出航しかけた船を必死で呼び止めたメアリの行動に注目が集まりがちだが、それを経済面で支援したマーガレットの貢献は非常に大きい。さらに、彼女がお針子だった時よりも、歌手として活躍する時の方が高収入なのは、当時の劣悪なお針子の労働環境、ひいてはそのような女性たちを生み出す社会に対する批判を提示しているようにも思える。

第二に、ジェンダーやセクシュアリティの観点においても、マーガレットは特殊な障害者である。「ペン・モーファの泉」のネストは、足が不自由になった後、片方の足が短くなったり痛みで青ざめたりしている様子が描写され、障害による身体への悪影響が強調されている。一方マーガレットは、失明した後にむしろ女性としての魅力が増していることが言及されるようになる。例えば、ウィルが初

めて彼女に会ったとき、歌声にすっかり魅了されることが述べられている。また、別の場面ではマーガレットの言動の変化や、ウィルの彼女への恋心について詳しい描写がある。

She[Mary] saw as clearly as if told in words, that the merry, random, boisterous sailor had fallen deeply in love with the quiet, prim, somewhat plain Margaret: ... that some inner feeling made the delicate and becoming rose-flush steal over her countenance. She did not speak so decidedly as before; there was a hesitation in her manner, that seemed to make her very attractive; as if something softer, more loveable than excellent sense, were coming in as a motive for speech; her eyes had always been soft, and were in no ways disfigured by her blindness, and now seemed to have a new charm, as they quivered under their white downcast lids. (148)

こうしたマーガレットの外見や内面における変化は、ネストのそれとは真逆のものである。最終的に、マーガレットはウィルと結婚することが小説の最終場面で語られ、婚約を破棄されたネストとの決定的な違いを示している。さらに、ウィルがメアりに恋の相談をする場面で、マーガレットは「天から舞い降りてきた天使」(163)に例えられ、メアリとジョブの口論の最中に現れた際には、彼女の穏やかさが「平和の天使」(234)と形容されており、マーガレットは障害者でありながら女性の理想像を思い起こさせるように描写されている。

第三に、マーガレットは、自身が持っている能力を非障害者から認められている。盲目になった後のマーガレットについては、彼女の障害に関する言及よりも視力以外の突出した能力に関して語られることが多い。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)で同じく盲目になるロチェスターは、視力と同時に屋敷という財産と妻を失っている。彼の盲目は、家父長制社会でジェインとの力関係が逆転するきっかけとなっており、マーガレットと異なって無力さが強調されている。一方マーガレットは、前述した歌唱力に加え、目が見えなくても誰の目が自分の顔に向けられているか感じ取る能力や、一人で歩いて出かける能力も描かれている。初めジョブは盲目の彼女が室内でさえ歩き回ることを心配し、彼女が一人で外出する際には後を付け、安全を確認していた。しかし、

彼女が独力で道を横断し、耳をすまして馬車などの正確な距離を把握できることを知り、その後は安心して一人で外出させている。このように、マーガレットは常に非障害者の保護下にいるのではなく、能力を認められ可能な範囲で自立した生活を送っている。ここから導き出されるのは、歩く能力の有無が障害者のエンパワメントに大きく影響していることである。マーガレットが盲目になっても一人で外出できる一方で、憐れみの対象として描かれたフランクは下半身不随であった。直立二足歩行が可能なのは人間のみであるため、その能力を失うことは、人間にとっての重要な要素を欠くことを連想させる。マーガレットが一人で歩く能力を備え続けたことは、彼女が憐れみの対象としての障害者にならなかった大きな理由だと考えられる。

マーガレットは、ネストが達成できなかった自己の能力を非障害者から認知してもらうことができ、これは彼女のセルフ・エンパワメントにもなっている。その結果、彼女はアリスを亡くしたウィルを慰めるという他者の慰安や、 Barton 家が困窮していた時期に訪問することでメアリの忍耐力と希望を高める役割を果たす。つまり、彼女は非障害者の憐れみの対象としてではなく、むしろ非障害者を支える能力を持つ存在として描かれている。こうした表象は、憐れみの対象であり、本来備わっているべき能力の欠如のメタファーでもあった障害者観を覆すものである。

第四に、周囲からの障害に関する言及が少ない一方で、マーガレットは視力を失った苦しみを自らの言葉で語るができる。⁹ 彼女は、盲目のためアリスの看病ができず、かえって邪魔になってしまうとジョブやメアリに語る。障害者のジェンダーと語りの力に注目する Clayton Carlyle Tarr は、19世紀の小説に登場する男性障害者にとって、障害はその後の人生において困難な課題となる一方、女性障害者は障害を通じて力を得ると述べているが (646)、ギヤスケルの障害者像もこれに当てはまる。その反面、憐れみの対象として描かれていた「リビー・マーシュの三つの祭日」のフランクは、自らの苦悩を自分で語る能力を持っていない。彼が体の痛み苦しむ様子や、身体が衰弱している様子は語り手やリビー、ディクソン夫人、日曜学校の生徒の親たちの目を通してのみ語られている。さらにペンソン氏の障害については、ルースやサリーによって語られるばかりである。Tarr の主張に加え、男性が障害を持つことは、男性障害者の周囲の女性に語る役

割を担わせる効果があると言えるだろう。

このように、マーガレットが社会で自己の能力を発揮し、周囲の非障害者から卑しまれることなく交流している様子は、彼女の盲目という障害（インペアメント）が社会生活を送るうえでの障壁（ディスアビリティ）になっていないことを意味する。Sami Schalk は、フェミニズム運動や障害者の権利運動のおかげで、現代の女性作家たちはエンパワーした女性障害者を作品に描くようになったと述べているが（174）、ギヤスケルはそうした社会運動が起こる遙か前から障害者と非障害者が共生する社会を描いていたのである。さらにマーガレットは視力の喪失により、彼女の歌を披露する場を近所の人々の前からマンチェスター以外の工業都市にまで広げることになった。これは、私的領域に限定されていた彼女の活動範囲が公的領域にまで拡大したことを意味している。『メアリ・バートン』では、メアリが恋人の無罪証明のために奔走し、裁判の証言台に立つことで女性の公的領域への参加を示すだけでなく、障害者のマーガレットも公的領域への参画を果たしていると解釈できる。マーガレットは、「男性障害者より貧困に陥りやすく、リハビリや雇用機会をなかなか得られないという女性障害者」（Goodley 45）という表象に収まらないのと同時に、ヴィクトリア朝のジェンダーイデオロギーまでも克服しているように見える。

結び

ヴィクトリア朝では、障害者は非障害者よりも劣った存在と認識され、社会の構成員として認められない存在であり、結婚相手としても不適だと差別されていた。さらに、経済的に他者に依存しなければ生活ができないなど、様々な点において困難を抱えていた障害者は、人々の同情や憐れみの対象となった。作家たちは、障害者を描くことで作品をより扇情的にすることができた。ギヤスケルもまた、「リビー・マーシュの三つの祭日」をはじめ多くの作品においてヴィクトリア朝の障害者が置かれていた状況を如実に描いていると考えられる。

しかしながら、ギヤスケルは同時代の他の作家と異なり、障害者を弱者として描くことのみにとどまらず救いも与えている。また、ネストのように憐れみの対象となることを自ら拒絶する障害者や、非障害者を支える障害者としてベンスン氏も描いている。このような障害者表象を通して、ギヤスケルは、非障害者が認

識している以上に障害者が能力を持っていることを読者に示そうとしていたのではないだろうか。マーガレットは女性身体障害者でありながら自らの能力をもって自己実現を果たすだけでなく、周囲の非障害者を支えエンパワーさせるという、それまでにない障害者像を示している。マーガレットのような障害者を描くことは、作品を扇情的なものにすることが目的でないと考えられる。こうしたギヤスケルの障害者表象には、ヴィクトリア朝の非障害者が持っていた偏見や先入観を覆し、障害者が非障害者に与える潜在的な力を読者に示すねらいがあったのだろう。ギヤスケルの肯定的な障害者表象は、彼女の社会的弱者に対する深い理解を反映しており、同時代における作家としての先見性を改めて示している。

注

- 1 西垣佐理は、「マーサ・プレストン」と「一時代前の物語」におけるヒロインの障害者看護行為をフェミニズムの観点から考察し、「女性同士の共同体構築という考えにギヤスケルが魅了されたことが『マーサ・プレストン』改稿の動機であった」(226)と述べている。
- 2 UPIAS は、インペアメントを“the functional limitation within the individual caused by physical, mental or sensory impairment”、ディスアビリティを“the loss or limitation of opportunities to take part in the normal life of the community on an equal level with others due to physical and social barriers”と定義した (Goodley 9)。
- 3 長谷川は、「非障害者」という表現を自身で考案したが、のちに障害児教育の先駆者である田村一二が「非障害者」や「非障害児」といった表現を常用していたことを知ったと明かしている (19)。
- 4 本文中の引用の邦訳は、すべて日本ギヤスケル協会編の『ギヤスケル全集2』、『ギヤスケル全集3』、『ギヤスケル全集別巻1』を使用した。参照頁数は Pickering 版による。
- 5 Lennard J. Davis の著作と同様に、文学・文化研究におけるディスアビリティスタディーズを発展させるきっかけとなった Rosemarie Garland-Thomson の *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature* (1997) がある。
- 6 1990 年には米国で Americans with Disabilities Act が、95 年には英国で Disability Discrimination Act が起り、教育や雇用、社会保障などにおいて、障害者に対する合理

的配慮が求められた (Burker and Murry xiv- xv)。

- 7 ギヤスケルの「手と心」(“Hand and Heart,” 1849) に登場する足の不自由なハリーは、娘の収入に支えられて生活していた。ここでも本来経済力を持つべき父親が娘の経済力に頼って生計を立てており、障害者の経済的依存性が描写されている。
- 8 「リビー・マーシュの三つの祭日」で、リビーがフランクの世話を「余った仕事の一つ」(I:67) と形容していることから明らかである。
- 9 この語りの能力はネストも持ち合わせており、身体障害者になってから不遇な扱いを受けてきた彼女は、足が不自由なまま生きるなら怪我をした際に死んだ方がよかったと嘆く。

引用文献

- Barker, Clare, and Stuart Murray. “Introduction: On Reading Disability in Literature.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker & Stuart Murray, Cambridge UP, 2018, pp. 1-13.
- Davis, Lennard J. “Introduction: Disability, Normality, and Power.” *The Disability Studies Reader*, edited by Lennard J. Davis, Taylor & Francis Group, 2013, pp. 1-14. ProQuest Ebook Central, ebookcentral-proquest-com.ez.wul.waseda.ac.jp/lib/ waseda-ebooks/detail.action?docID=1125176.
- Gaskell, Elizabeth. ‘Half a Life-Time Ago.’ 1855. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 3, edited by Charlotte Mitchell, Pickering & Chatto, 2005, pp. 343-82.
- . ‘Libbie Marsh’s Three Eras.’ 1847. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1, edited by Joanne Shattock, Pickering & Chatto, 2005, pp. 47-69.
- . ‘Martha Preston.’ 1850. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1, edited by Joanne Shattock, Pickering & Chatto, 2005, pp. 117-28.
- . *Mary Barton*. 1848. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 5, edited by Joanne Wilkes, Pickering & Chatto, 2005.
- . *Ruth*. 1853. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 6, edited by Deirdre d’Albertis, Pickering & Chatto, 2006.
- . ‘The Well of Pen-Morfa.’ 1850. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1, edited by Joanne Shattock, Pickering & Chatto, 2005, pp. 157-75.

- Goodley, Dan. *Disability Studies: An interdisciplinary Introduction*, 2nd ed, SAGE, 2017.
- Hall, Alice. *Literature and Disability*. Routledge, 2016.
- Holmes, Martha Stoddard. *Fictions of Affliction: Physical Disability in Victorian Culture*. U of Michigan P, 2009. ProQuest Ebook Central, ebookcentral-proquest-com.ez.wul.waseda.ac.jp/lib/waseda-ebooks/detail.action?docID=3414670.
- . “Embodying Affliction in Nineteenth-Century Fiction.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker & Stuart Murray, Cambridge UP, 2018, pp. 62-73.
- Schalk, Sami. “Disability and Women’s Writing.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker & Stuart Murray, Cambridge UP, 2018, pp. 170-84.
- Tarr, Clayton Carlyle. “Abnormal Narratives: Disability and Omniscience in the Victorian Novel.” *Victorian Literature and Culture*, vol. 45, no. 3, Cambridge UP, 2017, pp. 645-64. doi:10.1017/S1060150317000110.
- 石川准・長瀬修、『障害学への招待：社会、文化、ディスアビリティ』、明石書店、1999年。
- 長谷川潮、『児童文学のなかの障害者』、ぶどう社、2005年。
- 西垣佐理、『『マーサ・プレストン』と『一時代前の物語』——看護がもたらす『自立』と『共生』——』、『没後150年記念エリザベス・ギヤスケル中・短編小説研究』、日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2015年、219-28頁。
- ロイス・キース、『クララは歩かなくてはいけないの？：少女小説にみる死と障害と治癒』、藤田真利子訳、明石書店、2003年。

(早稲田大学大学院生)

Elizabeth Gaskell's Representation of Characters with Disabilities

Shino HOSHI

This paper explores how Elizabeth Gaskell depicted characters with disabilities in her fiction and what kind of roles they bear. I analyse six of Gaskell's works: 'Libbie Marsh's Three Eras' (1847), *Mary Barton* (1848), 'Martha Preston' (1850), 'The Well of Pen-Morfa' (1850), *Ruth* (1853), and 'Half a Life-Time Ago' (1855). Disability studies has been recognised as an academic discipline since the 1960s. Literary and cultural studies began to incorporate disability studies in the 1990s, but most existing studies have discussed contemporary novels or American literature. Even though Gaskell described various characters with disabilities in her fiction, they have not been focussed on in previous studies. In the Victorian era, most people regarded those who had physical or mental impairment as inferior, and many novelists depicted characters with disabilities with the goal of arousing pity. In fact, Gaskell describes Frank Hall in 'Libbie Marth's Three Eras' as an object of mercy. However, Margaret Jennings in *Mary Barton* and Thurstan Benson in *Ruth* do not seem to play the same role. Unlike the other characters with disabilities, these two are depicted as powerful characters who can support their acquaintances. Mr Benson saves Ruth when she attempts suicide, educates her, and encourages her to work as a nurse. Consequently, Ruth is able to enter the public sphere and earn the respect of many people in the town despite the fact that she is perceived as a fallen woman. Moreover, Margaret is economically independent and has a beautiful voice that she utilises as a singer. She uses her funds to support her friend, Mary Barton, when Mary is poor. Hence, not only does she achieve self-actualisation, but she makes her friends empowered. This paper clarifies the fact that Gaskell was unique among the Victorian novelists in demonstrating the abilities of people with disabilities in order to overcome discrimination against them.